

# 老人ホームにおけるお盆休み帰宅運動について

## 〔一〕 その意図

田 宮 仁

(佛敎大学佛敎社会事業研究所助手)

### 一、はじめに

標記運動は、ある特別養護老人ホームにおける、入所老人の帰宅願望を契機として開始されたものである。入所老人に強い帰宅願望の存在を認め、それに応える運動を展開することにより、標記運動についての問題を現実成立させるだけでなく、入所老人の自立性の尊重と家族（扶養義務者）の意識喚起を目ざすものである。併せて老人福祉の分野で問題対象となりにくかった宗教的性格を持つ問題を対象として、その対応を模索するものでもある。また本運動はその実践を通じ、民間の一老人福祉施設が自らの主張

と主体性を持つとする提言である。さらに本運動は地域社会に対して、地域の歴史的習慣である宗教行事を介在させることにより、施設との相互の交流を図り老人福祉そのものの質と量を幾分なりとも高めようとするものである。

本運動は新潟県長岡市所在の社会福祉法人長岡福祉協会・特別養護老人ホームこぶし園を基地として展開しているものである。従って本運動に関する研究は、施設長兼頭吉市、生活指導員小山剛以下こぶし園職員との協同研究であり実践である。ついては本論の前半は本運動の意図、後半は実践報告という構成を以って論及したい。

## 二、帰宅願望の顕在化・潜行化

本運動は上記の如く施設入所老人の帰宅願望を直接の契機として展開したものであるが、老人福祉施設入所老人にとって帰宅願望は、その願望の顕在化の有無に関わらず潜在的、基本的な要求のひとつといえる。

帰宅願望は文字通り自宅に帰りたいという願望であるが、この願望の顕在化してきた背景としては、「老人ホームをへ収容の場」からへ生活の場へへと高めるべきである」という提言<sup>(1)</sup>にみられる、老人ホームの在り方の変容が挙げられると考えられる。さらに最も大きな要因は、家族と離れ施設入所という事実による家族関係のバランスの崩れであろう。たとえ見かけ上の位置付けであっても家族とその存在関係のバランスを失うということは、特に高齢者の容易に受容しがたい事象であると考えられる。入所老人にとって、施設での新たな共同生活を、自身の生活歴の延長として受け入れ、消化するには時間のかかることである。かくしてその最も消化しにくい部分が頂点に達したときに帰宅願望は急速に顕在化すると考えられる。消化しに

くい（消化不良）ということに対しては、それからの逃避あるいは克服というような動きが生ずると考えられるが、どちらの動きによるにしても帰宅願望として顕現化する可能性は充分に認められる。

もっとも施設入所時及び入所以前の情報量の多寡や質によっても、消化のしかた（施設生活への適応）は異ってくる。入所以前の地域の社会福祉事務所や施設の職員（生活指導員・ケースワーカー等）によるオリエンテーションの充実の必要もさることながら、それ以前の地域における該当施設の認識度が問題であろう。所謂日常茶話のなかで交わされる情報が、消化の問題と深く関わる好き嫌い等の先入的要素となり得ることは充分に考えられるところである。一例を挙げるならば、本研究基地のこぶし園に隣接する特養わらび園（昭和四十六年十二月開設）は、新潟県中央部（中越地区）における特別養護老人ホームの先駆けのひとつであるが、そのわらび園開設時には入所時すでに帰宅願望が顕著に見られたということである。<sup>(2)</sup>その後十年を経て開設されたこぶし園の場合、入所時の帰宅願望はわらび園開設時に比べて可成り減少したことは、ベテラン職

員の証言するところである。このことは地域において特別養護老人ホームについての一般的認識が、十年という時間と共に施設自体や他の情報により家庭の茶の間にまで深まったことを意味するのではなからうか。このことは帰宅願望、或は帰宅願望の強弱という問題は、施設自体やこれに対する社会的認識の深化、さらに平素からの正当な情報の提供・浸透の度合如何に関わるところが大きいことを意味する。

次に施設へ入所してからの帰宅願望は、先述したように家族の一員としての位置付けが失われるということが、大きな契機となっている。それはまた新しい共同生活に抵抗があればある程その位置付けの喪失感を強め、帰宅願望をさらに助長することにつながるであらう。ところが共同生活への適応の可否という問題だけならば、時刻の経過、適応能力等により解消へ向う可能性がある訳である。

しかし帰宅願望という要請にはより複雑な人間存在に関わる要素が認められるのである。現在六十五歳以上の入居者は、明治から大正一桁の時期に生れ、徳川期以来の伝統的な躰や教育を、第二次世界大戦までに受けてきた人達であ

る。従って当時の思想や価値観を、人生における生活信条として掲げてきたことは確かであらう。そのうちのひとつに「家」に対する基本的観念（思いと言った方が適當かも知れない）がある。中根千枝氏は「日本の『家』制度の特色の一つにだれもがあげるのは、子が年老いた親のめんどうをみる、親の側からいえば、老後が安泰であるということです」<sup>(3)</sup>と述べている。同氏はまた「日本では、親は長男夫婦と一緒に住む習慣でしたから、（中略）日本に古くから慣習となっている、『居をともしする』ということが、私たちの心理にどれほど大きく作用しているかみることができます」<sup>(4)</sup>と同居について述べている。さらに日本の家が「ベースキャンプとしての働きを顕著にもっています」<sup>(5)</sup>と「家族（ウチ）とソトの関係」において言明している。これら中根氏の主張に俟つまでもなく、家に対するおもいは我々日本人特に戦前の制度に裏打ちされたなかで育った人間にとっては、無意識の裡に体質化されているとさえいえるようである。言いかえるならば、自分の存在自体を家族との関わりの中で確かめようとする、体質的な指向・要求である。これを当面の帰宅願望について考える場合、施設

入所老人は、入所という事実と同時に、基本的には家族の一員としての存在であり、家に対してほとんど本能的ともいえる強いおもいを有している存在であることをまず確認しておく必要がある。

入所後の帰宅願望に問題を戻し、その願望の現れ方にまず注目したい。入所後のどの時点で、どのような状態で、帰宅願望が顕著に現れるかは、個人差があって一律にとらえることはできない。しかし筆者の接した例からみるならば、口癖の如くその願望を常に表明する人は別として、職員への不信や同室者とのトラブル、同室者の帰宅外泊、また面会や食事、あるいは季節の移り目などをきっかけとする場合が多いようである。具体的には、口頭で訴える場合が最も多く、それも時には担当寮母や指導員では埒があかないと思ひこむのか、主治医や施設長に直接訴える場合がある。また極端な例では、身体面のある程度良い人であるが、自身で公衆電話をかけ家族に迎えを要請したり、タクシー会社と連絡したりする場合もある。ときには身の廻りの品を持ちスリッパのまま、玄関から出ていこうとする場面に遭遇したこともある。

斯様な帰宅願望が直截に表現される場合より、その願望が何らかの理由により潜行してしまう場合こそ問題であり、特に留意する要がある。ましてその理由が施設の管理の強化と関わり、これによって入所老人の願望が抑圧され、自立性が少しでも損われる方向に作用するならばなおのこと注意しなければならない。このことは、山下袈裟男氏が「老人ホームの課題」として留意を促している点でもある。すなわち同氏が入所老人の社会性・自立性が損われやすいことに關して、「これらの問題は、ある意味では、老人ホームを管理する側の職員組織が充実し、職員の業務に対する責任意識が高くなるほど生起しやすい、ということに留意すべきである」<sup>(6)</sup>と述べている点である。

しかしこの帰宅願望が潜行してしまう最も大きな理由は、やはり家族との関係において見い出せるのである。それは本研究のなかで行なった、アンケート調査の結果からも明らかである。すなわち、へあまり帰宅したくない・絶対帰宅したくないとする者の合計が三九・一パーセントであり、その理由としてへ帰宅しても面白くない・帰宅したら家族に迷惑がかかる・家族が受け入れてくれないを

挙げている者が九六・二パーセントの高率（表Aの(1)～(3)参照）を示していることにも伺える。

つまり入所老人は、自身の入所という事実を、家族との関わりのなかで再確認している、ということができるのではなからうか。このことは、先述した帰宅願望の顕在化あるいは潜在化という事実によって明らかである。また先の山下架装男氏が「東京都老人総合研究所」の一九八一年の調査をもとに「家族・親族との面会の状況については、ほとんどなしが実に二七・九パーセントを占め、つぎに年一～二回が一四パーセントでこの二つを合わせると全体の約四割程度はめったに顔をみせず、たまに来るときは施設で催す年中行事に渋々来園する程度であろう」と述べていることから、入所老人とその家族の関係が伺われることである。では、このような家族との関係に関心を払いながら、入所老人が自身の存在を確認していくにはどうしたらよいであろうか。

### 三、帰宅願望の底にあるもの

河合隼雄氏は『家族関係を考える』において、次のよう

に述べている。

「この世に自分が存在していることを、家族とのかかわりのなかで確かめる、いま流行の言葉を用いるなら、アイデンティティの確立ということが、家族との関係のなかで問われているし、（中略）アイデンティティと言えば、われわれ日本人は『イエ』の永続性の中にそれを見出そうとしてきた、（中略）自分自身を何とか『永遠の相』の中に定位したいと願うものである。われわれ日本人はそれを『イエ』の中に求め、永遠の同伴者としての祖霊を大切にしてきたのである」<sup>(8)</sup>

この河合隼雄氏の指摘は、本研究で取り上げている入所老人の帰宅願望の底に潜んでいるものを的確に言い当てていると考えられる。現時点での入所老人が、先述したように第二次大戦までにその主たる教育を受けた人達であるならば、この河合氏の指摘はより頷けるものである。いまの「永遠の同伴者として」ということについては後述することとして、自身の存在を家族との関わりのなかで確かめる、またその確かめを「イエ」の永続性の中に見い出そうとすることについて、まず考えてみたい。家については多くの識者の貴重な見解がみられるが、竹田聰洲氏のそれを同うならば次のようにある。「個人も家族もすべて何らか

の家に属し、家は各世代を貫く自己同一性を以て累代にわたり家族の生態を根源的に規制した<sup>(9)</sup>」ということであるが、この竹田氏の指摘は先の河合氏の指摘と共通するものである。さらに竹田聰洲氏は「家の幸福と存続を念とする先祖の存在は、累代の家族にとって家の存在と同じ程度に自明のことであり、家永統の規範は、この先祖の祭を絶やさないことの中に集中的に表れる<sup>(10)</sup>」と日本人の先祖供養・祖霊崇拜の意味を明かしている。つまり日本人において自身の存在を家族との関わりのなかで確認し、その確認の仕方象徴的なものとして「先祖の祭」が位置付けられる伝統の存在することが解る。

このことが現在においても生きていることは、他でもない法律によってその存続・廃止が規定されていることにも伺えるのである。第二次大戦後の現行民法において、「家」の制度が廃止されたことは周知のことである。ところが明治民法の「系譜・祭具及ヒ墳墓ノ所有ハ家督相続ノ特權ニ属ス」に該当する部分が、現民法の相続編の中で「系譜・祭具及び墳墓の所有権は、前条の規定にかかわらず、慣習に従って祖先の祭祀を主宰すべきものがこれを承継する。

云々」(第八九七条)<sup>(11)</sup>と存続している点に注目するからである<sup>(12)</sup>。

さらにこと「先祖の祭」に関しては特に老人の担ってきただ役割を見逃すことはできない。従来、家族内はもちろん地域共同体の内では、様々な宗教的儀礼の執行者として、その役割の担手であったことは事実である(この点に関しては森岡清美氏の詳細な研究がある<sup>(13)</sup>)。またその役割を担うということは、現時点までは老人にとって当然のこととして受けとめられ、さらにその担手としての自覚は自身の存在意義の再発見であり生きがいであったともいえる。ところで老人施設への入所という事実、この宗教的儀礼の執行者としての役割を現実には奪うことである。特に先祖供養の役割の喪失は、先述した、自身の存在を家族との関わりのなかで確かめる、あるいは現行民法でみた「祖先の祭祀を主宰すべきもの」としての自分自身の喪失を意味することになりはしないであろうか。孝本貢氏は「現代都市家族における先祖祭祀と老人」において次のように指摘している。

「その役割(先祖祭祀)の担手を完遂することにより、みずか

らも被祭祀者として祭祀されるという精神的保証が確保されていたと考えられよう。ところが、家族の分離、分化、夫婦家族を単位とした家族境界の設定、さらに地域共同体の統合の弱体化・解体化は(中略)老人の持っていた家族、地域共同体内での地位・役割の体系の剥奪を意味しよう。そして孤立した老人は世代的継承の保証のないままに、私的に先祖祭祀を維持しているのではないか」(14)(内及び傍点筆者)

この孝本氏の指摘に筆者も共感するのであるが、「私的に先祖祭祀を維持しているのではないか」という推論は特に重要視したい。

ところで先述した河合・竹田両氏に共通する見解は、われわれ日本人についての指摘であるが、それは本研究で取りあげている老人においてより顕著であり、入所老人の帰宅願望の根底に見い出せるものと考えられるのである。さらにその帰宅願望の傍で「私的に先祖祭祀を維持している」としたら、何らかの方法でその帰宅願望を満足させられる手段を講じる必要があると考えられる。またその手段を講じることにより、入所老人が自身の存在をより確かなものとして生きてゆく支柱となるであろう。

#### 四、帰宅外泊の可能性を求めて

帰宅願望の満足は、単に帰宅外泊すれば得られるというものではない。帰宅願望の底にあるものにも留意して、考察を進める必要がある。一般的に施設の入所者が帰宅外泊するのは、正月と盆に比較的多くみられることである。ついでには前節の考察を受けて、現在の日本において先祖祭祀の最も一般的な行事である、「お盆」に注目して本節の考察を進めたい。

お盆について前出の竹田聰洲氏は次のように述べている。

「盆は早くから仏教の濃厚な着色をうけて民間仏教行事の代表格とされ、仏寺の方ではその由来を仏説盂蘭盆經の所説によつて説くのを常としたが、盆行事の中心は、臨時に設けた祭棚にオ精霊サマ・先祖サマ・盆サマなどと呼ばれる祖霊の来訪を迎えて祭ること(15)にあり、それは明らかに仏説とは無関係の固有信仰である」

この竹田氏の指摘は、現在の日本において行なわれている盆行事が如何なるものであるかを明らかにするものである。前節において入所老人の帰宅願望に関係して家族や

「イエ」ということに注目したが、その「イエ」というものが日本ではそもそも宗教性を帯びた性格を有していたと考えられる。さらに宗教がその「イエ」というものを介在させて日本の社会に定着してきたことは、日本佛教の歴史に例を見るまでもなく明らかである。佛教が「イエ」を介し、民間信仰と結びついたからこそ日本の社会に根付いたといえよう。<sup>(16)</sup> その最も象徴的なことがらのひとつとして盆行事があり、現在も「民族大移動」と称される程の故里への回帰運動として存続しているわけである。

民族大移動といわれ、帰省列車の混雑ぶりが毎年報道されるが、そのような現象を伴うお盆について一般的には如何に受けとめられているのであろうか。現在では佛教行事としてのお盆よりも、夏と共に巡り来る国民的行事としてとらえられ、休暇・帰省のイメージが先立つものとなっていると考えられる。しかし単なる休暇であるならば、帰省でなくともよいわけである。帰省するということは、故里に・生まれた家に・実家に・本家等に帰ることを意味する。従ってここでもまた、前節で管見した「自分が存在していることを、家族（イエ）との関わりのなかで確かめ

る」ということが、意識下に存在するであろうことがいえってくる。しかもお盆自体は本来祖霊の来訪を迎えて祭ることにあるならばなおのことである。それゆえにお盆における民族大移動とも称される故里への回帰運動は、帰宅願望の発露の一形態とみなすことができるのではなからうか。

では、そのお盆になると都会に出た子供達が帰る、嫁いだ娘が里帰りする、孫も集まる——しかし施設入所老人はどうであらうか。確かにどの施設でも、お盆期間に帰宅外泊は普段よりは多くなるであらう。しかし現実には前出した山下架梁男氏が指摘したように、約四割の人達は面会すら無いという事実が存在する。また本研究の基地であるこぶし園においても、本運動開始前の昭和五十七年のお盆には、在園者九十九人中三十四名が帰宅したが（図1参照）、約三分の二の六十五人は在園のままお盆の期間を過したのである。一時期に全体の三分の一に当る人数が何らかの形で帰宅したならば、折々の帰宅のときに比べ、帰宅しなかった人たちの胸中に穏やかならぬものが去来するであろうことは推測される。確かに多くの事情により、入所という事実に至っている老人であるが、このお盆の時期こそ、一



人でも多くの入所老人の帰宅外泊を実現できるよう努力するのに、最もその時宜を得ることではなからうか。

お盆に向けて入所老人の帰宅外泊を推進することは、いくつかの効用がみいだせるのである。まず入所老人にとって、お盆にお墓参りに帰るということは、自身の帰宅への願いを、より具体的に目的意識として集約できるのではないだろうか。また受け入れ家族にとっても、お盆ということが、その受け入れについての抵抗を少なくする要因になると考えられるのである。これらの効用を期待することについては、地域の特性に目を向けるからである。本研究の基地であるこぶし園が、「こしひかり」に代表される新潟米の産地を背景とする地方都市に有り、農家を主体として佛教信者が多く、歴史的にお盆行事が伝統として地域に定着している事実を踏まえるからである。北陸地方は一般に真宗王国ともいわれるが、その一角にあるこの地域の宗教的特性は、お盆に一家揃ってお墓参り・お寺参りすることを当然のこととしている。またお盆ということが、入所老人自身や家族にのみ、お盆であるがゆえの有効性を帯びるわけではない。施設の職員（特に若い人達）に対しても、彼

らの協力を得るに、お盆ということは説得力を持ち得たのである。その理由は、宗教的なお盆というよりも、先述した民族大移動的な感覚においての協力であったかも知れない。しかし結果的には、彼ら若い職員がボランティアの人と共に、積極的に本運動を推進し、本運動を通して（具体的には、入所老人の帰宅やお墓参りに付添うことにより、その老人自身の姿から）、入所老人の帰宅願望の意味や強さ、あるいは単なる習俗的な行事としてのお盆ではないお盆を感じ受けとめてきたのである。

## 五、お盆休み帰宅運動とお墓参りツアー

上來述べてきたように入所老人の帰宅願望の存在と、その願望に内在する意味を探ることにより、お盆という時期を選び、その願望に応える運動を展開する運びとなった。

そこで本研究の基地である特養こぶし園においては、昭和五十八年の夏より「お盆休み帰宅運動とお墓参りツアー」の名のもとに、その運動を実施に移した。その実際については、後段の協同研究者による「(二)——実践報告——」に譲ることとして、実施に当って留意した点を紹介しておき

たい。

本運動の目的ということで、まず施設内で周知を期したのは、次の三点である。

一、入所老人の帰宅願望に応える努力を、家族と施設側の両者の協力で行なう。

二、帰宅を契機として、本人及び家族の双方が、お互いに家族の一員であることを確かめ、家族の絆を深める一助とする。

三、入所老人の家庭復帰の可能性を、常に求める姿勢に立って、この運動をとらえる。

さらに、実施に先駆けて、受け入れ家族に対して、本運動の趣旨の説明とともに受け入れ協力の要請を行ない、その結果を受けて基本的なプログラムを組むこととした。

一、家族の受け入れが可能な場合

二、家族の受け入れが困難な場合

ア、墓参ツアーの企画

イ、施設内において「盂蘭盆会法要」の実施

三、物故者法要

四、新盆の供養

一の「家族の受け入れが可能な場合」は、本運動の核であり、五十八年度は在園百名中四十三名、五十九年度は同中四十七名が一時帰宅を果したのである。二の「家族の受け入れが困難な場合」における、ア・イ等の諸企画について一言しておこう。初めのアの「墓参ツアーの企画」については単身者や、諸般の事情で帰宅が不可能な入所老人、に対して行なったものである。本運動のきっかけであった帰宅願望には、先祖の墓参りということが大きな要因の一つであった。そのことに留意した帰宅に代る措置であると同時に、この企画を実施することにより、帰宅願望に幾分なりとも応えられるのではないかとして企画したものである。なおこの企画の実施に当っては多くのボランティアの協力と共に、先述した仏教信者が多いという地域特性に関連し、寺檀関係が確保されており、入所者の菩提寺の把握がしやすい状況にあったことが幸いした。次のイの「施設内において「盂蘭盆会法要」の実施」は、一の帰宅、及び二のアの墓参ツアーに参加できない事情にあった人（ほとんどが身体的・健康面の理由である）を、対象として行なったものである。これらの一及び二が入所者に直接した、

お盆という時期を選んでの、帰宅運動とその補完を期する企画である。三の「物故者法要」は文字通りの法要であり、隣接する施設との合同で行なっている。四の「新盆の供養」は、過去一年以内に死亡した入所者を対象とし、それぞれの家に職員が可能な限りお参りに行くというものである。斯様な四項目を基本的なプログラムとして、本運動を実施したわけである。

さらに本運動の推進にあたり、留意した点を述べておきたい。まず、単年度の試みとして終らせず持続的な運動として展開したいとした。幸い五十八年、五十九年の二カ年にわたり、本運動を実施することができ、その成果も伺えることから、今後も推進していく予定である。図1によって明らかなように、五十八年度は、帰宅者は四十三名墓参ツアー参加者九名計五十二名、五十九年度は同四十七名と二十名の計六十七名と着実にその参加者は増加した。特別養護老人ホームにおいて、在園者百名中六十七名の参加は、大きな数字といえるのではなからうか。また参加してよかったとする者が、九四・二パーセント(表Cの一参照)にのぼることからも、本運動実施の成果をみることでき

る。

## 六、佛教に比重をかけた視点からの

### 本運動の再検討

上来述べてきたことにより、本稿の標題に掲げた「老人ホームにおけるお盆休み帰宅運動」の概略は紹介できたかとおもわれる。また本運動の意図が入所老人の帰宅願望に応えようとすることによって出発したことも述べた。本節では、前述の直接的な意図に対し、間接的というか筆者自身の意図を中心に、上来意識的に触れずにきた問題について論及したい。本運動を開始する契機が、入所老人の帰宅願望に注目したことによることは明らかであるが、一方において、佛教と社会福祉の接点を探りたいという姿勢のもとでの模索が存在していた。この佛教と社会福祉の接点を探るといことが、筆者自身の意図であり、本運動のひとつの意図でもある。

従来の佛教社会福祉論の多くは、筆者の管見するところでは、佛教者もしくは佛教教団の行なってきた社会事業に関する歴史的問題の追求、あるいは佛教思想と社会科学と

しての社会福祉理論とが、それぞれの立場で（極端な言い方をすれば）一方が一方を握り伏せるかまったく無視したような形で、その理論追求が行なわれてきたように見受けられる。先学の業績の上に、今後も斯様な問題追求を行なっていくことは、その学問的体系化のためには不可欠であり、筆者もその重要性を痛感すると同時に、微力を以て参加したいと願っている。

しかし筆者自身の現段階では、佛教と社会福祉の接点となるような問題を、社会福祉の現場で、まずは見つけ出しそれを問題とすることのなかから、改めて佛教と社会福祉の関わりを探っていきたいと期するものである。ついては本稿においても、前節までは佛教經典や佛教思想を、できるだけ直接に持ち出すことなく、民族学や心理学等の他領域に関心を払いながら論旨を展開してきたつもりである。

ところで、社会福祉の現場において、どうしても従来这个社会福祉の理論や実践では、対処しきれない問題が顕在化することがままあると考えられる。特に本研究のような老人福祉の分野では、その質と量の高まりが求められるとき、一般に心の問題といわれるものが浮びあがってくる

（心の問題が即宗教に関係するというのではないが）。ある問題が顕在化したとき、その問題を掘り下げていく過程において、その問題自体の性質によっては、佛教思想と関わることにより、問題解決への方向が見い出せる場合がある。そのような場合こそ、佛教と社会福祉の接点と考えられるのである。またその場合が、必ずしも佛教思想のみではなく、既存の佛教教団や寺院あるいは佛教者という、存在との関わりであることも認められるであろう。この後者である存在との関わりこそ、その接点としての位置付けは大きくなるであろう。佛教思想は、むしろ問題の解決や展開の方向性において、その関わりの意味を持つと考えられる。

斯様な筆者の意図を、本運動の研究を再検討することにより、吟味してみたい。まず、「帰宅願望の底にあるもの」ということで再度考えてみたい。先には河合隼雄・竹田聴洲西氏の指摘を通して、老人に限らず日本人が自身の家族とのかかわりのなかで確かめ、その確かめの象徴として祖先の祭りを大事にしてきたことを考察した。これはいうまでもなく、心理学・民俗学の立場による見解である。

ここまでの帰宅願望というときの帰る家は、現実存在し、入所までを過していた家である。しかし先述したように墓参りツアーや、施設内の盂蘭盆会法要を企画せざるをえない対象が存在する。この対象者（現実の家に帰るに帰れないという入所老人）は、どのような家に帰ろうとするのであろうか。彼らの帰宅願望も、その顕在化・潜在化においては、現実には帰るべき家のある人と変りはないのである。墓参りツアーや法要、そのもののなかに、この答えはあるように思われる。それは、真に帰るべき処を見つけることにより、帰るべき家を発見するのである。昭和五十八年一月十七日付朝日新聞に、「厳かなボケ、まぼろしの在所を求め——現実の寂しさから逃避」という一文に次のようにある。

「在所へ行く」といって突然出ていく（中略）この老人に与つての在所は、七十年、八十年ものタイム・トンネルをもどつた父母と暮らした家なのだ。四才か五才かの、温かい母のふところを抱かれた記憶だけが、しっかりと頭の中に整理されている。まぼろしとなった在所を求めてさまよっているうちに「迷子」になってしまう」<sup>(17)</sup>

入所老人が「ウチへ帰りたい」と訴えるとき、その「ウ

チ」は、現実の家なのか、この新聞記事にみられる幼児期の無心の甘えが許された家なのか、単にボケというような言葉では決めつけられない、意味と重みを持っていると考えられる。

この時点で帰宅願望の問題が、佛教思想と関わるならば、自ずから一つの方向性が生じるのである。つまり、まぼろしとなった在所を求めてさまよううちに、迷子ではなく、真に帰るべき家の発見に向かうのである。このことは先に後述を約束した、「永遠の同伴者」との問題とも関係するので、これと同時に問題を進めることとする。なお佛教思想との関わりが問題点となるため、佛典等の引用をしいこう。佛教なかでも浄土教思想の立場で結論から先にいえば、真に帰るべき家は阿弥陀佛のお浄土であり、永遠の同伴者とは佛の誓願でありお念佛そのものであるといえる。従つて浄土教思想の立場でこの二つの問題に関わるならば、一方の「ウチ」の問題は、現実の家、故里の家、幼き日に居た家、さらには「家郷はいずれの処にかある。極楽の池の中、七宝の台なり」<sup>(18)</sup>と結んでいく方向が得られるのである。また「永遠の同伴者」の問題は、「我、阿闍世

の為に無量億劫に涅槃に入らず<sup>(19)</sup>』という、『涅槃經』の文によっても明らかな、佛の願いにその本質を見い出せるのである（これらの結論づけには、浄土教思想の立場での考察を論述しなければならないが、本稿の直接目的ではないために省略させて頂く。但し当然のことながら、これらの結論づけは、佛の教えに随順するという姿勢なくしては生じないものである）。ところで、この真に帰るべき家と永遠の同伴者の問題は、「俱会一処・ともに一処に会する」ということにより、収束されると考えられるのである。それは浄土教者の墓標に、この「俱会一処」の文字を刻む例があることから、たんに理念的な考え方というよりも、より具体的イメージを持って受けとめられていることを認めたい。

斯様な、真に帰るべき家と永遠の同伴者の問題の、考察と結論づけは、この二つの問題が生死観に関わる問題であることを伺わせる。つまり帰宅願望の問題が、仏教思想と関わり、その帰るべき家とは何かを問うていくことにより、生死観の問題となり、従来一般的にはタブーとされてきた死に関わる問題として、最終的には位置づけられるの

である。このことは、最も深刻な帰宅願望が、「自分の家の量の上で、家族に見守られて、安らかに」という、臨終時の望みの存在によっても伺えることである（このことに關しては、総理府老人対策室の「終いの看取り」調査によれば、生存老人の七四・九パーセントが、死亡した老人の生前には九四・四パーセントが自宅での死を望んだことが報告されている<sup>(20)</sup>）。まして日本の人口の高齢化とともに、多くの人にとってその死が老年期のものとなってきた現在（昭和五十七年の死亡総数は約七十一万人であったが、そのうち八十才以上の者は約六〇パーセントを占める<sup>(21)</sup>）、この死に関わる問題は不可避のものとなっている。したがって生死観の確立とともに真に帰るべき家の発見と、永遠に見守っていただける存在の確かめこそ、最も根本的な処で老人の安定をもたらすものであろう。そのためには、本節で主張した佛教思想（ここでは浄土教思想であるが）との関わりによって、その方向性が得られると考えられるのである。

次に、佛教と社会福祉の接点を探る場合の、もうひとつ

の問題であった、既存の佛教教団や寺院あるいは佛教者という、存在との関わりについて考えてみたい。本運動の展開にあたり、地域の農家を主体として佛教の信仰者が多いということが、幸いしたことは先述した。少なくとも一家揃ってお墓参りに行くことを当然としていることや、寺檀関係がしっかりしていることなどは、佛教（直接的には寺院）を中心とした目に見えない体系が存在していることを意味する。ところで、本運動の墓参ツアーにおいて、該当寺院の住職が自発的に墓前の読経をあげてくれるなど、直接的な協力がみられた。まずはこのような、人を中心とした、参加協力による接点の形成確保が可能である。さらには、後の「実践報告」においても提言するつもりであるが、寺院が保有する信用と情報量の豊かさをもとに、地域や家族、施設、対象者自身との調整機能の役割を期待したいものである。ごく最近まで「田舎のサロン」的な、役割を担っていた寺院は多いのである。まして本運動の如き内容に対しては、その期待に充分応えられるとおもわれる。

将来的に期待されるのは、この佛教を基礎とした共同体的な組織は、蓄積された多くの情報を拠り処として、現在

の福祉の在り方に、重層的に重なりあうことにより、その接点が得られるものと考えられる。このことを本運動との関係でみるならば、次のことがいえよう。本運動が老人ホームを拠点として出発したものであるが、運動として成立していくためには、地域との連携が必要不可欠である。その連携において、地域に点在するそれぞれの寺院が、その佛教を基礎とした共同体を背景に協力するならば、連携の強化と同時に運動の遂行をより確かにするものと考えられる。いいかえるならば、施設と寺院との、ネットワーク化である。

またこの連携ということでは、本研究の大会発表時に、村上尚三郎氏の指摘と指導を頂いた。それは地域の社会福祉協議会との連携による、運動の促進化ということであった。確かに「社協との連携を欠いては老人ホームは自己満足的な存在となってしまう、広がりと方向性をもって住民のニーズに添えていくことはできないという自覚が必要であろう。もちろん市区町村社協の自覚と立ち上りを前提として」<sup>(22)</sup>ということからも、福祉施設がその主張と主体性を保持して、運動を展開しようとするときには、社協との連携

は不可欠のことといえよう。従って、施設を拠点とした本運動は、社会福祉協議会や福祉事務所、さらには寺院の参加も得て、そのネットワーク化を図ることが今後の課題となるうと考えられる。

ところで本節においては、筆者の意図として、佛教と社会福祉の接点を探ることが存在した。また前節までは、意識的に佛教經典や佛教思想に直接ふれないようにしてきたとも述べた。そのことは、本運動の展開そのもののなかに、佛教と社会福祉との接点が見い出せるのではないか、という期待が存在したからである。直接に佛典等を持ちださなくとも、結果的に、佛教の思想が生かせるならば、筆者自身の意図した、本運動に対する目的が、伝えられると仮定したからである。本節における、佛教に比重をかけた視点からの本運動に対する再検討で、幾分なりとも、その意図を明らかにできたかとおもわれる。

しかし実際には、筆者の目論見をはるかに超えて、本運動の展開そのもののなかに、佛教と社会福祉の交わりが存在したのである。それは前述したように、若い施設職員やボランティアの人達が、本運動実施の過程で、入所老人の

帰宅やお墓参りに付添うことにより、他でもないその老人自身の姿から、学び得た成果である。彼らが、自分の担当した対象者としての存在であったはずの、老人の傍らで、共に手を合わせている自分自身を発見したときに、広がった世界である。

#### 註

- (1) 「老人ホームのあり方に関する中間意見」 中央社会福祉審議会・老人分科会・昭和四十七年。
- (2) 拙稿、「浄土教思想による人間理解——施設入所老人の帰宅願望を通して——」（発表要旨）『日本社会福祉学会第三十回大回発表要旨集』一八三～四頁、昭和五七年。
- (3) 中根千枝『家族を中心とした人間関係』一三六頁、講談社・昭和五二・二・十発行。
- (4) 同右、一三九頁。
- (5) 同右、一六〇頁。
- (6) 山下袈裟男『老人福祉』一三八頁、川島書店、昭和五八・九・十発行。
- (7) 同右、一五三頁。
- (8) 河合隼雄『家族関係を考える』一八三～四頁、講談社、昭和五五・九・二〇発行。
- (9) 竹田聰洲『日本人「家」と宗教』一九頁、評論社、昭和五一・十・三〇発行。
- (10) 同右、一九頁。



(11) 『六法全書』昭和五九年版二〇七二頁。

(12) この点は、竹田聰洲、前掲書の第五章(一七一～二二六頁)に詳しい。

(13) 森岡清美『真宗教団と「家」制度』、創文社、昭和三七・十二・十発行や、『真宗教団の家の構造』御茶の水書房、昭和五一・十一・二五発行など。

(14) 孝本貢「現代都市実族における先祖祭祀と老人」・副田義也編者『日本文化と老年世代』二六四頁、中央法規出版、昭和五九・四・三〇発行。

(15) 竹田聰洲・前掲書、四六～七頁。

(16) この点は、カトリック中央協議会諸宗教委員会の「祖先と死者についてのカトリック信者の手引」の内容からいえることである。詳しくは『中外日報』昭和六〇・二・一六付参照。

(17) 『朝日新聞』昭和五八・一・一七付△「私」の中の「私たち」▽というシリーズの十回、看護婦阿部初枝氏からの聞き書。

(18) 『般舟三昧楽讃』慈愍和尚の文、岩波文庫版『教行信証』行巻、八〇頁より延引。

(19) 『涅槃経』梵行品の文、同右、信巻二〇七頁より延引。

(20) 井上勝也「終末介護の諸問題―終りの看取りに関する調査より―」『季刊・社会保障研究』十八巻四号四三八頁、東京大学出版会、昭和五八・三・二五発行。

(21) 『厚生白書』昭和五八年版・大蔵省印刷局、昭和五八・十

・三一発行。

(22) 蜷江紀雄「新しい老人ホームの構築」・『老人福祉年報』一九八三年「一一六～七頁、全社協、昭和五八・八・二〇発行。